体感。感動。感謝。NBUのCOC事業をお伝えします。

coc-nbu.jp

December 2016 Nippon Bunri University, COC MAGAZINE

文部科学省 地(知)の拠点

日本文理大学COC事業

おおいた、つくりびと

小規模集落に元気と希望を届けたい。

人口減少・高齢化問題が深刻化する県内の集落を訪れ、
若者のアイデアと行動力で地域のコミュニティを活性化。

No. 12

Copyright Nippon Bunri University, All rights reserved.

▲「ふるさと体験村」の宿泊ケビンと、竪穴式住居。大分県内でも河川プールを併設した宿泊施設は珍しい一方、運営や維持管理には人手が必要。

豊後大野市大野町土師（はじ）地区で、体験交流活動を通じ、地域の課題を解決。

地域の皆さんとともに取り組む、地域コミュニティ維持活動。

豊後大野市大野町の土師地区では、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなってきている。そこで建築学科「環境・地域創生コース」のメンバーが中心となり、小規模集落が抱える課題を学生の視点で解決することにチャレンジ。何度も土師地区に足を運び、地域の皆さんと語り合い、農作業やイベントなどを手伝うことで見えてきた、「必要なこと」とは…。

▲「ふるさと体験村」開村式での河川プールへの鮎の放流。つかみ取りに向け、子どもたちから歓声が上がる。

小規模集落が直面する、さまざまな問題に戸惑う。

土師地区の人口は200人弱。高齢化率67％のこの小規模集落では、年々、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、NBU建築学科では環境・地域創生コースの学生を中心に、土師地区を定期的に訪問し、地域住民とともにコミュニティ維持活動に取り組んできた。3年前、同地区で活動を始めた学生たちは、自分たちが普段生活するフィールドとの違いに戸惑いを隠せなかった。高齢者にとって貴重な移動手段であるバスの運行は1日に数本程度。地域のシンボルとなっている施設である「ふるさと体験村」は老朽化が進んでいる。

1年目。不慣れなこの土地で、何を考え、どのようなカタチで地域の皆さんとつながっていくことができるのだろう。すべてが手探りの中、学生たちは決意する。「まずは地域の営みを知るために、地域の皆さんとともに汗をかくことから始めよう」と。普段、地域の方が行っている作業内容や道具の使い方を学び、いざ現地へ。

腰を屈めたままで長時間続ける草むしり、足場の悪い中で行う木の枝打ち作業、想像以上の重労働である稲刈りやかけ干し作業、体験したからこそ実感できた地域で生活することの大変さ、厳しさ。作業の合間に「こうして若い人が手伝ってくれるから、ワシも、もう少し頑張れる気がしてきたわ」とおじちゃんに声をかけられ、胸に熱いものがこみ上げる。

作業終了後は、地域で収穫された農産物でつくっていただいたおにぎりや豚汁を囲んで昼食会。一緒に汗を流した後だからこそ、地域のみなさんとの会話も弾む。

▲初めて手にする草刈り機。地域の方に使い方を教えていただく。

地域の方の言葉で知る、小規模集落で生活する大変さ。

翌年、土師地区での体験交流活動はさらに活性化する。サマーシーズン目前、「ふるさと体験村」の開村式に向け、何日もかけ宿泊施設内や河川プールの補修、整備作業を実施。滝のように流れ落ちる汗を拭うことも忘れ、炎天下の中、朝から夕暮れまで、黙々とプールの土砂出しや清掃、ペンキ塗りを続ける彼らの姿がそこにあった。

▲河川プールのペンキ塗り。長時間腰を屈めての作業は重労働。

▲「ふるさと体験村」開村式当日、少しでも開村式を盛り上げようと、学生たちもスタッフとしてお手伝い。

迎えた開村式当日。運営スタッフとして参加した学生たちが目にしたものは、たくさんの子どもたちの弾けるような笑顔。鮎のつかみ取りや餅つきなどのイベントも盛り上がりをみせ、「こんなに賑やかなのは何年ぶりやろか」と地域の皆さんも驚いていた。

体験交流を通じて培われた地域住民との絆。そこから本当に地域の方々が必要としているもの、解決すべき課題を発見するために、地域住民へ直接インタビューを実施。「古民家の魅力発見」、「空き家対策」、「地域の生活維持対策」チームに分かれ、じっくりと話を聞く。農作業を手伝い、地元のイベントをともに盛り上げたからこそ築けた信頼関係。「ふるさと体験村をもっと活用してほしい」、「増え続ける空き家をどうすればいいだろう」…寄せられるたくさんの声。その課題について、チームのメンバーと解決策や今後の方向性を夜遅くまで話し合った。

信頼関係があるからこそ、本音と本気で向き合える。

そして翌日、学生たちは地域住民の方々へ課題解決に向けた提案発表会を開催。「ふるさと体験村」をPRするホームページ制作、コミュニティバスの活用策、古民家を民宿や休憩所として利用するアイデア…若者ならではの視点から提案されるユニークなアイデアの数々に、真剣に耳を傾ける地域の方々の姿が印象的だった。土師地区での活動はもちろん今も続いている。建築学科のメンバーならではの「ウッドデッキの改修プロジェクト」では、デザインから設計、原価管理、施工までを自分たちですべてやり遂げるのだ。さらにこの土師地区をモデルケースに小規模集落が抱える問題と解決策をまとめ、大分県知事への発表、意見交換会を行った。

自分たちのことを頼りにして、待ってくれている人がいる。地域の皆さんのために…ではなく、地域の皆さんとともに。学生たちだからこそできる活動は、まだまだたくさんあるようだ。

▲「ふるさと体験村」宿泊ケビンの改修作業。

▲必死に活動する学生の姿に、地域の方々との距離も縮まる。

▲土師地区の元郵便局。過疎化で廃止となったが、学生の提案をきっかけにカフェへと生まれ変わる。

▲建築学科で培った知識でウッドデッキを改修。

NEWS

小規模集落のこれからを、地域住民と一緒に考える。

大分県内には数多くの小規模集落が点在している。地域のシンボルである「ふるさと体験村」の老朽化が進むなか、どのように修復し、活用していくのか。大学と地域がともに考え、カタチにしていく地域コミュニティ維持活動に注目が集まっている。

※掲載記事は許諾を受けています。

2015.6.13 大分合同新聞（朝刊）

若い感性が"刺激"

大野町 土師地区 住民と日本文理大生が交流

日本文理大学（大分市）の1年生32人が豊後大野市大野町の土師地区を訪れ、草刈りやスギの枝打ちなどを体験して地元住民と交流した。同地区では4年前から年3回、同大学の学生が農作業などを体験している。

工学部建築学科の学生が参加し、6班に分かれ、地区内にあるキャンプ場「ふるさと体験村」周辺の除草や、柴北川河川プールにたまった土の除去作業などをした。作業服に身を包んで慣れない作業に汗を流した学生たちは、住民手作りのおにぎりと豚汁の昼食を堪能、班ごとに感想を発表して交流を深めた。

受け入れをしている住民組織「土師振興協議会」は昨年、市からふるさと体験村の施設を譲り受けて運営している。田尻高二事務局長（66）＝農業＝は「高齢化が進んでいる地区では、若い学生の感性が刺激になる。キャンプ場運営へのアドバイスなどの協力も期待している」と話した。

草刈り機を使って除草する学生＝豊後大野市大野町中土師

学生たちの活躍は、NBUのCOC特設サイトをチェック！ nbu coc 検索

Copyright Nippon Bunri University, All rights reserved.

日本文理大学COC事業

キラリびと

『おおいた、つくりびと』で活躍する学生、教職員、地域の皆さんにインタビュー。

12

工学部
建築学科4年

安部 正吾

Q.「小規模集落での体験交流活動」で大切なことは何でしょう?

A. 1年生の頃から地域での体験交流活動に参加していました。自分たちが取り組む課題に対して、実際に見て、聞いて、感じたいと思っていましたが、初めの頃は手探り状態で何をすればいいのか…わからないことばかりでしたね。学生だけで決めて、学生だけで作業をする。それでは地域の皆さんとのコミュニケーションが生まれませんし、本当の意味での地域創生とは言えません。大切なのは、地域の方が何を望まれているのか、地域を元気にするためにやるべきことを真剣に考えることだと強く思いました。先生や自治体の方々と何度も議論を重ねながら、少しずつカタチにしていきました。

Q. 地域の皆さんとの交流を振り返ってみて。

A. 体験交流活動では、コミュニケーションを取ることの大切さを改めて実感することができました。最初の頃は自分たちも緊張してしまい、積極的に地元の方に話しかけることができなかったのですが、一緒に食事したり、農作業を手伝ったりすることで、表面的なものではなく、体感的なコミュニケーションが取れるようになりました。住民の方のお宅を訪問してお話を聞く機会があったのですが、その際、皆さん「よく来たねー!」と気さくに声をかけてくださって…とても嬉しかったですね。就職後も、大学生活で学んだ、人との関わり合いを大切にしながら頑張っていきたいです。

and more...

PICK UP! COCプロジェクト

2016.11.28 **そこに居るだけで安心～お地蔵様と、子どもたちの存在に感謝する日**

明礬温泉
「お地蔵様のおせったい」

いかにも温泉に来たなあ…という独特の硫黄の匂いと、藁ぶきの湯の花小屋。あちこちから旅館の女将さんたちが集まり、明礬温泉は大賑わい。

代々継承されてきた地域行事「お地蔵様のおせったい」について、学生が紙芝居を作成し、子どもたちにその意味を説明した。「お地蔵様は、いつも、みんなの安全を見守ってくれているんだよ」

小さな手を合わせて、子どもたちは、神妙な顔でお参り。一方で、お菓子をもらったとたん、いつものように騒ぎ出してしまう子どもたち。『こら、静かにしなさい』と言おうとしたけれど、『こんな平穏な時間を過ごせることに感謝ですね』と、お地蔵様のお声が聞こえてきたようだった。学生も女将さんたちも、幼い子どもたちの笑い声が響くって、本当に幸せなことなんだって、心からそう思った。

そんな和やかな光景を、力強くどんと構えた鶴見山が見守り、お日様が優しく照らしている。

まだまだあります！
大分県内をステージに進行中のプロジェクトが盛りだくさん。

- 若者が感じる祭りの醍醐味
- 初夏のエネルギーで育つ“感じる心”
- 現代版 あぜつくり

etc...

くわしくはNBUのCOC特設サイト **coc-nbu.jp** へ

coc-nbu.jp

文部科学省 地(知)の拠点
NBU日本文理大学
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL.097-592-1600(代表)
http://www.nbu.ac.jp

大学院 工学研究科	□環境情報学専攻 □航空電子機械工学専攻
工学部	□航空宇宙工学科 □機械電気工学科 □情報メディア学科 □建築学科
経営経済学部	□経営経済学科

Copyright Nippon Bunri University, All rights reserved.